農村における伝統芸能の継承と村おこし

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34385

第５章　農村における伝統芸能の継承と村おこし

神谷浩夫

（１）日本の主な祭り

①近江八幡左儀長祭り

・近江八幡は豊臣秀次が築城し、安土から移住した人々を中心に開かれた町

・義長の本体は新藁で編んだ高さ約３メートルの三角錐の松明、その上に竹を立てて細長い赤紙や薬玉、巾着、扇などで飾る。左義長の中心に据え付けられた「だし」は、その年の干支にちなんだものを海の幸（海産物）や山の幸（穀物等）で作られている

・昔は毎年３月１４日、１５日に行われてが、最近は３月中旬の土・日曜日に開催

・初日の午後は日牟礼八幡宮に参集した十数基の左義長が市内を巡行、翌日は町を練り歩いて「けんか」、最後に日牟礼八幡宮で奉火

②福野夜高祭

・毎年 5 月 1 日と 2 日の開催される

・350 年の伝統を持つ祭り

・江戸時代に福野町の町立てを祝って始まったとされる

・横町・新町・上町・七ツ屋・御蔵町・浦町・辰巳町の若衆たちが、高さ 7mの大行燈を引き廻し、威勢よく町を練り回す

・2 日深夜 12 時過ぎに、各町の行燈がすれ違いざまに相手方の行燈飾りを壊すのが見もの

③岡谷太鼓祭り

・諏訪下社と結びついた御諏訪太鼓が起源

・1969（S44）年に大阪万国博覧会のあと商業祭として御諏訪太鼓の指導の元、岡谷太鼓存会を結成し「岡谷太鼓まつり」が始まる

・「300 人による日本一の揃い打ち」が名物

④木島平村内山の柱松子

・柱松子（柱松柴燈神事）は修験者が行った「験競べ（げんくらべ）」に由来する神

事
・上と下（または北と南）に設置された２本の柱松に、火打石で火をつける速さを競い、その遅速により天下泰平か五穀豊穣かを占う
・H17 年に飯山市瑞穂の小菅神社「柱松柴燈神事」と木島平村の 2 つの「柱松子（内山・南鴨)」の３つが「北信濃の柱松行事」として国の選択文化財指定
・内山の柱松子は「炎の奇祭」とも言われ、地区の若者たちが担ぐ「お天王さん」といわれるみこし（別名荒神輿）が、お堂の前の炎の中でもみ合う勇壮な姿は、火付けの験競べに並ぶ見所

（２）能登のキリコ祭り
①柳田大祭（柳田キリコ）（能登町柳田）
・旧柳田村各地区のキリコが白山神社に集合し神輿に供奉する
・キリコ祭りの原型を最も留めている祭りの一つ
・16 日２１時頃､各自地区のキリコが白山神社に集合し､5 基の神輿とともに神社から数百メートル離れたお旅所へと渡御する

②輪島市名舟大祭
・御陣乗（ごじんじょ）太鼓で有名な輪島市名舟町の祭り
・毎年 7 月 31 日、8 月 1 日に開催される
・31 日の 22 時頃から 5 本のキリコが行進を始め、神輿の海上渡御と同時に御陣乗太鼓の奉納打ち
・8 月 1 日（日）は 14 時 40 分頃より、神輿の海上渡御、御陣乗太鼓の奉納打ち

※毎年、地域創造学類の学生 10 人、留学生 5 人が参加
※31 日の昼過ぎに角間を出発、各家庭に分宿、祭りの御馳走・酒がふるまわれる
※1 日の朝に名舟を出発して角間に戻る

（３）伝統芸能で農村に雇用を生み出せるか？
観光客を呼び込んでいる伝統芸能
・青森県弘前市　津軽三味線
・青森県青森市　ねぶた祭り
・秋田県羽後町　西馬音内盆踊り
・埼玉県秩父市　秩父夜祭
・岐阜県郡上市　郡上踊り
・岐阜県高山市　高山祭
・富山県富山市　八尾風の盆

・佐賀県唐津市　唐津くんち
・宮崎県高千穂町　夜神楽

統芸能を取り入れた地方を拠点とするプロ集団
・新潟県佐渡島　「鼓童」　和太鼓　→　約 60 人
・秋田県田沢湖町　「わらび座」　農村劇　→　約 100 人？
・大分県竹田市（旧久住町）　「TAO」　和太鼓　→　約 10 人

③「鼓童」と佐渡島との関係
・佐渡は文化人類学や民俗学にとって格好のフィールド
・1960 年代の学生運動、宮本常一、永六輔らの影響で「鬼太鼓座」が結成→次第にプロ化
・当初は、地域住民と断絶
・現在は、融合しつつある

④木島平村の伝統芸能の資源
・内山の柱松子
・鬼島太鼓（小林春彦さん、小林達哉さん）
・語り部交流会（常田富士男さんなど）

※輪島市の御陣乗太鼓が参考になる

（４）現代社会における地域おこし・村おこしと和太鼓ブーム
1）現代社会の特色
　現代社会の特色はコミュニティの崩壊と言える。地縁的コミュニティの喪失である。地縁的コミュニティの喪失は、いわゆる「ムラの伝統」を崩壊させた。地域はたんなる個人の集まりでしかなくなり、「伝統行事」を支える共同体的基盤はなくなった。それとともに、過疎地域と都市で同時並行して、伝統的行事が失われていった。
そうであるならば、都市よりもコミュニティが残存している農村あるいは地方で和太鼓（伝統芸能）が盛んであるはずである。でも違う。都会でも、かなり受け入れられている。

2）和太鼓のどんな点が地域おこしにとって有用か？
・地域おこしのために用いられるものは、地域の歴史（郷土史）、祭り（伝統的祭り、創作された祭り）、芸能（歌舞伎、謡）、食文化
※「加賀百万石」→「百姓の持ちたる国」はさほどネームバリューがない、継体天皇

が越の国からやってきた、というのもネームバリューがない
※越中のあんどん、能登のキリコ
※芸能（エイサー、ジャズ・フェスティバル、世界○×音楽祭）
※食文化（牡蠣祭り）

・和太鼓は伝統を感じさせる（たとえ主役でないにしても、祭りで頻繁に用いられてきた）ので、地域おこしの手段としては比較的便利であり、それゆえ日本各地で「○×太鼓」というネーミングが与えられてきた。

3）和太鼓はなぜコミュニティが喪失した社会に広まったのか？
伝統を感じさせる、歴史を感じさせる、比較的身近である
ふるさと創世資金など、1970 年以降の豊かな社会における「ふるさと回帰」の流れにのる
見る側と演じる側との分離、見る側から演じる側への転換が容易（和太鼓の演奏を見てやってみたいと演じる側に転じる人が多い）

4）域振興策として適している点
①参入障壁が低い（ムラ以外の人も加わることができる）
YOSAKOI ソーランは非常に低い＜和太鼓＜昔ながらの祭り
※よさこいソーラン、和太鼓、伝統芸能・祭り
※担い手のメンバーシップの固定性
［固定的］　伝統芸能＞和太鼓＞よさこいソーラン
具体的に言えば、その分布を図に表現する場合に、伝統芸能・祭りは非常に容易、和太鼓もある程度可能、よさこいソーランは不可能

・よさこいソーラン……参加者はイベントごとに異なる、毎回メンバーを募集する（職場の仲間、飲み屋の仲間など）、やめるのも自由、一定期間の間練習する
・和太鼓……参加者はある程度固定的である、参加希望者は誰でも受け入れられる（参加が許される地域的な範囲は存在しない）、いつもメンバーを募集している、やめるのも自由、長い年数にわたって練習が必要
・伝統芸能・祭り……参加者はある集落・町内に住んでいることが原則、性別・年齢などの条件を満たせば参加することが当然視されている、やめるのは難しい（やめる際にはコミュニティから疎外されることも覚悟する必要がある）、長い年巣にわたって練習が必要

集団のパフォーマンス（→個人や特定団体には補助金を出しにくいが、団体組織があ

れば支出が容易）
地域の歴史と結び付けやすい（日本各地に存在する）→「ふるさと太鼓」

5）なぜ最近頭打ちなのか
・サッカーのようなクラブ化した組織形態が広がるためには必要
・広い裾野と高い頂点
・YOSAKOI ソーランの流行ほどは受け入れられない理由（若年層は中高年よりもさらに流動的＝「場」に応じた組織）
・太鼓の値段が高い
・舞台に立つためには 10 年を要するというのは、一般大衆に広まるには長すぎる

6）和太鼓チームを見た印象

＜御陣乗太鼓保存会＞…伝統的な和太鼓

・輪島市の名舟集落の住民全員が保存会のメンバーとなっている。依然として強固なコミュニティが維持されている。これは、過疎化が深刻化している能登半島でも例外的と思われる。名舟集落の人口減少あるいは集落戸数の減少は、周辺の他の集落と比べると深刻度は小さいと思われる。御陣乗太鼓は名舟集落の人々にとって、一定程度の収入ともなっているし、またまちづくり、村おこしの資金も提供している。ただ、今後は少子化がさらに進展すると予想されるため、御陣乗太鼓の将来は油断できない。

＜打族＞…創作太鼓
・かつてのコミュニティに存在していたはずの異なった年齢層間の交流が和太鼓を通じて一部では生じている→コミュニティの喪失した社会における対話の可能性はあるが、対話が行われていないかもしれない：よりインテンシブな調査が必要だろう